

再犯防止推進計画における薬物依存症者の地域支援を推進するための政策研究

研究代表者 松本 俊彦

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 部長

研究要旨：

【目的】 本研究班の目的は以下の 2 つの課題を解決することで、再犯防止推進法制定下の薬物依存症者地域支援体制の構築に資することである。その課題とは、1 つは、薬物依存症支援に係る中長期的予後の実態を把握することであり、もう 1 つは、初期介入からリハビリ期間を経て社会復帰に至るまでの、回復ステージに応じた切れ目のない支援体制を構築することである。

【方法】 本研究班では、上記の目的を達成するために、以下の 6 つの分担研究課題を立てて研究活動を実施した。1) 「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」（研究分担者：松本俊彦）、2) 「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」（研究分担者：嶋根卓也）、3) 「薬物依存症者に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究」（研究分担者：白川教人）、4) 「更生保護施設における薬物依存症者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」（研究分担者：森田展彰）、5) 「薬物依存症者への就労支援のあり方に関する研究」（研究分担者：引土絵未）、6) 「司法と福祉の連携による薬物依存症者への地域支援とその回復過程に関する質的研究」（研究分担者：高橋康史）。

【結果】 薬物問題を抱える保護観察対象者のコホート調査（VBP）では、順調に対象者と調査実施エリアを拡大し、初年度 17 箇所であった精神保健福祉センターは最終年度までに 20 箇所まで拡大し、2017 年 3 月から 2021 年 12 月末までに、20 箇所の精神保健福祉センターから計 642 名の保護観察対象者が調査に参加した。研究活動の結果、VBP 参加を通じて、国内各地に精神保健福祉センターを起点とした保護観察対象者の地域支援体制を構築することができた。途中、コロナ禍による影響で保護観察所におけるリクルート率が低下した事を受けて、最終年度より刑務所釈放前教育時でのリクルート情報の提供を追加し、矯正—保護—地域精神保健福祉をつなぐ連携体制を築いた。

「ダルク追っかけ調査」では、初年度は、計 457 名から同意を再取得し、薬物依存症者を対象とする縦断研究としては依然として大規模なコホートを維持できていることが確認された。2 年度も、計 457 名から同意を再取得し、薬物依存症者を対象とする縦断研究としては国内最大規模を維持している。最終年度は、コホート全体の 50% について 5 年後転帰を追跡することに成功し、その高い断薬継続率が確認された。

精神保健福祉センターの調査からは、薬物依存症の相談件数の増加、薬物依存症回復プログラムの普及が確認されるとともに、精神保健福祉センター主催の生活保護担当者研修を通じて、支援力の向上、ならびに薬物依存症者に対する忌避的感情の低減が進みつつあることが明らかにされ

た。更生保護施設における調査を通じては、初年度は、同施設におけるかかわりによって、対象者が他者への信頼や自分への内省を高め、自主性を高めていることが明らかにされた。2年度は、刑の一部執行猶予制度」が対象者に好ましい意識変容を及ぼしている可能性、さらには SMARPP 実施を通じて職員の意識改革が起こっている実態が明らかにされた。最終年度は、SMARPP 実施を通じて職員の意識改革が起こっている実態を確認するとともに、地域連携に資するパンフレットの開発と配布を行った。

民間回復施設の就労支援に関する調査では、初年度は、物質使用障害に対する治療と職業訓練の統合システムの重要性が確認された。2年度は、テキストやワークブックなどによる構造的な就労支援プログラム開発の必要性と財政基盤の確保という課題が明らかにされた。最終年度は、これまでの実態調査と海外での情報収集の知見を踏まえ、「薬物関連問題をもつ人の就労ワークブック」を開発した。

地域生活定着支援センター利用者の調査からは、初年度は、支援者がポジティブ／ストレングスな視点から評価と介入を行うことが、薬物再使用の抑制に資する可能性が明らかにされた。2年度は、薬物依存症に限局しない包括的・総合的支援の必要性、ならびに保護観察対象者に対する SMARPP の好ましい機能が明らかにされた。最終年度は、薬物依存症に限局しない包括的・総合的支援の必要性、ならびに保護観察対象者に対する SMARPP の好ましい機能が明らかにされた。

【結論】 本研究班では、3年間の活動を通じて、エビデンス創出とともに、研究活動そのものや、研究の一環として実施される研修会や意見交換会を通じて、薬物依存症者の地域支援体制の構築を推進した。本研究班終了後も、いくつかの分担課題については研究活動、研修会、意見交換会を継続し、薬物依存症者の地域支援体制の構築を推進する予定である。

研究分担者

嶋根 卓也 (国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 薬物依存研究部
心理社会研究室長)

白川 教人 (横浜市こころの健康相談センター
センター長)

森田 展彰 (筑波大学大学院人間総合科学研究
科 ヒューマン・ケア科学専攻 准
教授)

引土 絵未 (日本女子大学人間社会学部社会福
祉学科 専任講師)

高橋 康史 (名古屋市立大学大学院 人間文化研
究科 講師)

これまでわが国の薬物問題対策は「供給の断絶」(規制・取り締まりの強化)に偏り、「需要の低減」(依存症の治療・回復支援)には多くの課題がある状況で推移してきた。

こうしたなかで、平成 28 年 6 月には「刑の一部の執行猶予制度」が施行され、これを機に、関係機関や団体が緊密に連携した、地域における薬物依存症者支援の必要性が高まった。さらに、平成 28 年 12 月には再犯防止推進法が制定され、これにもとづき、平成 29 年 12 月には、犯罪対策閣僚会議において自治体の「再犯防止推進計画策定」の努力義務化などが定められ、地域に薬物依存症者の支援体制を構築することは、もはや努力目標ではなく、国や自治体の義務となった。いまや、保護観察から切れ目のない地域における支援の実現に向けて、地域の関係機関や民間支援団体の連携をより緊密

A. 研究の背景と目的

とし、必要な支援を提供できる体制を確立することは、わが国喫緊の課題といえるであろう。

しかし、いまだ地域の医療機関や相談支援機関の側には薬物依存症者支援の経験が乏しく、薬物依存症者の転帰情報など、対策の企画立案にあたって参照できる基礎的データも存在しない状況である。すでに2015年11月19日には「薬物依存のある刑務所出所者等の支援に関する地域連携ガイドライン」（法務省保護局・矯正局、厚生労働省社会・保護局障害保健福祉部）が発出されており、その基本方針として、薬物依存者に対する支援を刑事施設や保護観察所又は医療機関いずれかの単一の機関に委ねるのではなく、相互に連携し、それぞれが有する責任、機能又は役割に応じた支援を、切れ目なく（シームレスに）実施するよう努めること、さらには、民間支援団体との連携体制構築の重要性が示されている。

すでに研究代表者は、平成28～30年度の厚生労働科学研究において、「薬物依存のある刑務所出所者等の支援に関する地域連携ガイドライン」の課題、ならびに各論部分に関する補強的提言を行っているが、その提言を地域に根づかせていくためには、さらに克服すべき課題が山積している。具体的には、薬物問題を抱える人たちの中長期的な転帰に影響を与える要因を明らかにし、リハビリから社会参加までの支援のあり方、あるいは、更生保護施設に対する地域側からの支援、さらには、地域における薬物依存症者支援を、当事者の視点から明らかにする必要がある。

そこで本研究は以下の2つを目的とする。1つは、薬物依存症支援に係る中長期的予後の実態を把握することであり、もう1つは、初期介入からリハビリ期間を経て社会復帰に至るまでの、回復ステージに応じた切れ目のない支援体制を構築することである。

B. 研究方法

本研究は、以下の6つの分担研究課題から構成される。

1. 「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」（研究分担者：松本俊彦）
2. 「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」（研究分担者：嶋根卓也）
3. 「薬物依存症者に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究」（研究分担者：白川教人）
4. 「更生保護施設における薬物依存症者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」（研究分担者：森田展彰）
5. 「薬物依存症者への就労支援のあり方に関する研究」（研究分担者：引土絵未）
6. 「司法と福祉の連携による薬物依存症者への地域支援とその回復過程に関する質的研究」（研究分担者：高橋康史）

以下に、各分担課題の具体的な研究方法を述べる。

1. 「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」（研究分担者：松本俊彦）

保護観察の対象となった薬物事犯者の転帰を明らかにし、転帰に影響する要因を明らかにするとともに、保護観察から地域支援への橋渡しをするシステムを構築するために、すでに分担研究者らは、保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら、保護観察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する、「Voice Bridges Project (VBP) : 「声」の架け橋プロジェクト」を平成29年3月より実施している。これは、保護観

察所にて対象者をリクルートし、管轄の精神保健福祉センターにて研究参加の同意を得て、対面もしくは電話による追跡を3年間実施するコホート研究のデザインで実施されている。

本分担研究では、前回の研究班より継続してきた保護観察対象者コホート調査に関して定量的解析を実施するとともに、毎年度、VBPに参加する精神保健福祉センターに対して、薬物依存症地域支援体制における現状と課題に関するアンケートも行き、質的解析も実施した。

2. 「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」(研究分担者: 嶋根卓也)

本分担研究は、2016年に開始された「ダルク追っかけ調査」の継続研究である。2016～2018年度までの第一期調査(FU1～FU4、フォローアップ=FUと表記)では、全国46団体のダルク利用者695名が追跡対象となった。

初年度は、「ダルク追っかけ調査」を継続することで、ダルク利用者の中長期的予後を把握することを目的とした。2019～2021年度までを第二期調査(FU5～)とし、フォローアップを継続した。

2年度以降は、民間支援団体利用者の予後と支援の課題を明らかにすることを目的とした。具体的には、ダルクの利用期間によって対象者を分類し、新規利用群と継続利用群を比較し、アブステナンス(断酒・断薬)の状況を含めた予後を検討するとともに、覚醒剤症例における自助グループへの参加とアブステナンスとの関係を明らかにした。

最終年度は、5年間に渡って追跡を完遂した者(追跡完遂者)の特徴を明らかにし、継続的な断酒・断薬率、薬物関連問題の重症度の時点変化を検討した。また、最終フォローアップ調査における自記式アンケートに基づき、自助グループの活動状況と断酒・断薬との関係性につ

いて検討を行い、ダルク意見交換会を通じて、コロナ禍が回復支援活動に与える影響について課題を抽出・整理した。

3. 「薬物依存症者に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究」(研究分担者: 白川教人)

本分担研究では、全国の市区町村における薬物依存症支援の理解向上・均てん化および地域連携・支援の円滑化および「生活保護担当ワーカー向け薬物依存症対応基礎研修テキスト」の最適化(研究①)、全国の精神保健福祉センターにおける薬物依存症の相談件数および回復プログラム等の実施状況の把握(研究②)、ステイグマ尺の開発と自治体職員を対象とした薬物依存症に対する意識調査(研究③)を行うことを目的とした。この目的を達成するために、以下の3つの研究を実施した。

4. 「更生保護施設における薬物依存者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」(研究分担者: 森田展彰)

本分担研究では、更生保護施設における薬物問題を持つ人の回復状況やそれに対して刑の一部執行猶予制度や施設の支援や関連機関との連携状況が与える影響を明らかにするために、3つの研究を実施した。

第1に、施設利用者に対する縦断的アンケート調査:施設利用者に対して、入所時と退所時、退所後に薬物依存に対応する動機づけ、精神健康、適応上の問題を測定し、またその変化に刑の一部執行猶予制度の対象であることや、支援内容が与える影響を分析した。

第2に、更生保護施設の利用者や支援者の質的研究:面接記録について、複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach、TEAと記す)による質的分析を行った。

そして最後に、更生保護施設と関連機関の意見交換会：更生保護施設・保護観察所、医療保健機関、ダルク等の援助者を集めて意見交換会を開催し、支援におけるポイントをまとめ、これを小冊子にまとめた。

5. 「薬物依存症者への就労支援のあり方に関する研究」(研究分担者: 引土絵未)

本分担研究は、地域の民間依存症回復支援施設等における就労支援について焦点をあて、薬物依存症者の就労支援の実態と課題を明らかにするとともに、実際に行われた支援の好事例を収集することを目的としている。

この目的を達成するために、初年度には民間依存症回復支援施設ダルクを対象としたインタビュー調査を実施し、先駆的事例として米国ニューヨーク州においてヒアリング調査を実施した。

2年度は、アルコール依存症を主な対象とし薬物依存症の受け入れ実績のある就労支援を実施する民間依存症回復支援団体 3 施設を対象にインタビュー調査を実施し、初年度の調査対象を含め 11 施設のインタビューデータについて質的分析を行った。

最終年度は、依存症の利用者のいる就労移行支援事業所 2 施設、および、出所者の採用支援・教育支援団体 2 施設、薬物事犯者を採用している企業 3 社へのインタビュー調査を実施した。上記 18 機関のインタビュー調査から、薬物依存症者の就労における困難性とその支援の創意工夫について抽出することを試みた。

6. 「司法と福祉の連携による薬物依存症者への地域支援とその回復過程に関する質的研究」(研究分担者: 高橋康史)

本分担研究は、司法と福祉の連携による地域支援が、薬物依存症者にいかなる影響を与え、薬物依存症者の回復過程にどのような機能を

与えているのかを、支援者と当事者に対するインタビュー調査によって明らかにし、同時に、ポジティブ/ストレングスな視点から薬物依存症者の回復モデルの試案を提言することを目的に設定した。

この目的を達成するために、初年度は、2つの研究を実施した。1つは、地域生活定着支援センター(3か所)に対するヒアリングであり、もう1つは、24名の薬物依存症者(ピア・サポートから始まった民間施設の利用者)に対するグループ・インタビュー調査を行い、その「語り」の構造を実証的に解明することを試みた。

2年度および最終年度は、地域生活定着支援センターによる支援を受けた薬物依存症者を対象として、矯正施設等出所後の転帰に関するインタビュー調査、保護観察所の薬物処遇プログラムにかかわる看護師を対象として、司法領域における薬物依存症者とのかかわりの実際と課題に関するインタビュー調査、および、薬物依存症から回復した後に支援者となった6名に対してもインタビュー調査を行った。

C. 研究結果

1. 「保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究」(研究分担者: 松本俊彦)

「保護観察対象者コホート調査」で得られた量的検討では、平成29年3月から令和3年12月末までに、20の精神保健福祉センターから計642名の保護観察対象者が調査に参加した。1年後追跡完了者は253名、2年後の追跡完了者は127名、3年後の追跡完了者は63名であった(追跡率は1年後80.1%、2年後76.5%、3年後70.8%)。初回調査時における対象者の平均年齢は46.1歳で、男性が76.0%、週4日以上働いている者が39.1%であり、保護観察の

種類の内訳としては、仮釈放の者が63.4%と最多であった。主たる使用薬物としては覚せい剤が93.5%、逮捕時DAST-20の平均値は11.0と中程度、89.9%が中等症以上の薬物問題の重症度を示し、治療プログラムを受けている者が75.1%であった。

追跡中の各調査期間における違法薬物再使用率は、3か月後では3.0%、9か月～1年では3.2%、1年6か月～2年では3.2%、2年6か月～3年では7.9%であった。治療プログラム参加率は1年後には45.5%に減少し、2年後38.6%、3年後23.8%と年々低下したが、それに比べると、累積断薬継続率は、約1年経過時点で約90%、約2年経過時点で約90%、約3年経過時点で約80%と、その低下は緩徐であった。 Kaplan-Meier解析を実施したところ、約1年経過後の累積断薬継続率は約90%、2年経過後の累積断薬継続率も約90%であり、3年経過後の累積断薬継続率は約80%であった。

1年以内に再使用した者の特徴としては、初回調査時点で精神障害者保健福祉手帳や身体障害者手帳所持者が多いこと、刑務所への服役回数が多いことが確認された。3年以内に使用した者の特徴としては、初回調査時点で未婚の割合が多い傾向がみられた。1年後調査でQOLを「良好」と申告した者は男性が多く、初回調査時点で有職者が多かった。「不良」と申告した者は初回調査時点で治療中の身体疾患が多かった。3年後調査では有意な差はなかった。また、男性・覚醒剤使用者に限定し、1年後までの違法薬物使用に関連する要因を検討したところ、「無職」と「相談相手の存在」が保護要因として、「社会福祉サービスの利用」がリスク要因として同定された。

なお、法務省保護局観察課から提供されたデータを分析した結果、調査実施地域における薬物事犯保護観察対象における本調査同意率は9.8%で、同意者(701名)は非同意者(6,444

名)に比べ男性が有意に少なく、平均年齢は高かった。保護観察の転帰では、期間満了した者の割合が同意群は87.3%、非同意群は73.6%で同意群には身体拘束や死亡、余罪での保護観察取り消しの転帰者は確認されていない。(令和3年12月末)。

VBPに参加する精神保健福祉センターを対象としたアンケート調査の質的検討からは、これまでには支援につながっていなかった薬物依存症当事者が、VBPを通して精神保健福祉センターにつながっており、調査という枠組みを通して年単位で関わる中で、潜在的な切実な支援ニーズが浮き彫りになるケースがあることが明らかになった。精神保健福祉センターの職員が薬物依存症の当事者に対する理解を深め、他の自治体の支援体制や状況を知る機会が増えるなど、VBPを通して支援者・支援組織の側に様々なポジティブな変化が生じていることが伺えた。

その一方で、頼れる人がいない、仕事がない、身体疾患や精神疾患がある、母子家庭であるなど、健康度が低い人が調査・支援関係の中断に至りやすい可能性が示唆された。就労を開始するなどの生活の変化により、精神保健福祉センターの業務時間である平日の日中に電話することが難しくなり、中断に至るケースがあることもわかった。

その反面で、女性、携帯電話を所持している人、家族等の相談できる人や医療機関などとのつながりをもっている人、誰かと話したいという気持ちを持っている人、誰かの役に立ちたいと思っている人、仕事や家庭などの生活が比較的安定している人、などが、調査・支援関係を継続しやすいケースの特徴として挙げられた。

3年間の研究活動を通じて、単なる調査のみに関わりでなく、薬物以外の生活上の悩みなどを聴くことで中断が少なくなるという意見や、

調査への協力を依頼するという関係性が継続しやすさと関わっている可能性も示唆された。

2. 「民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究」(研究分担者: 嶋根卓也)

今回、前研究班から継続しての5年間のコホート調査から、以下の事が明らかにされた。

5年後までの追跡が完遂したのはコホート全体の50%であり、追跡完遂者には、「回復のモデルとなる仲間がいる」という特徴がみられることが明らかにされた。本研究における高い追跡完遂率の背景には、フォローアップを担当したダルク職員と利用者との良好な関係性が影響している可能性がある。また、スタッフの持つ当事者性が、対象者にとっての回復のモデルとなっていた可能性がある。

コホート全体の約30%が5年間に渡って、一度もアルコール・薬物の再使用がない状態、いわゆるクリーンの状態を保っていることが明らかになった。ダルクの継続利用群は、新規利用群に比べて、断酒・断薬率が10%以上高いという結果が得られた。追跡完遂者に絞って、断酒・断薬率を算出すると、継続断酒・断薬率は59%であり、これはコホート全体の2倍近く高い結果となった。

薬物関連問題の重症度は、ダルク入所時には集中的な治療を必要とする相当程度であったが、ベースライン調査から1年が経過した時点では中程度(外来治療で対応できるレベル)まで低下し、その後も緩やかに減少傾向が続いた。

断酒・断薬の状態を維持した継続アブステナンス群は、対照群に比べて、自助グループ活動を積極的に行っていることが明らかになった。継続アブステナンス群には、ホームグループがある、会計、電話・メール対応などのサービスを経験している、スポンサーがいる、ミーティング以外の時間にスポンサーに相談するなど

の特徴がみられた。積極的な自助グループ活動は、断酒・断薬を維持する可能性がある。

コロナ禍で自助グループや施設外プログラムが制限され、コロナ禍での自粛生活にストレスを感じる者が多い中で、オンラインミーティングが新たな受け皿になっている可能性が示唆された。

3. 「薬物依存症者に対する地域支援体制の実態と均てん化に関する研究」(研究分担者: 白川教人)

本分担研究班では、毎年度2回の生活保護担当者を対象とした研究会を実施し、その効果について評価尺度を用いた検証を行った。日にウェブ形式の研修を実施した。その結果、いずれの年度についても、J-DDPPQ尺度上、の有意な変化が確認されるとともに、自由記述欄の情報から、研修会の講師として当事者が登壇することの肯定的な意義が明らかにされた。

また、本分担研究班では、毎年度、全国の精神保健福祉センター69箇所を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、各センターにおける薬物問題の相談件数は、平成27年度(平均77.3件)から一貫して増加傾向にあること。そして、薬物依存症を対象にした回復プログラムを実施するセンターは、令和2年度は47箇所まで増加したが、コロナ禍の影響で令和3年度は45箇所に減少していた。家族教室などの家族向けプログラムを実施しているセンターについても、令和2年は49箇所であったが、令和3年度は48箇所に減少した。

コロナウイルス感染症の流行に伴うセンターの依存症事業への影響では、個別の相談では感染対策を実施して事業を実施しているセンターが多かったが、本人プログラムや家族教室に関しては一時的に実施を見合わせているセンターも少なくなかった。

最終年度には、当事者や家族に対するインタビューから薬物依存症に関するスティグマ尺度を開発した。その尺度を用いて自治体の様々な職員を対象とした調査、解析を行った結果、生活保護担当ケースワーカーであること、薬物依存症の支援従事者であること、年齢が60代以上であること、ピアと連携して支援に当たった経験がないこと、支援の中で被暴力被害の体験があること、回復した薬物依存症者にあつた経験がないこと、プログラムに参加した経験がないことといった要因が、薬物依存症に対する高いスティグマと関連していることが確認された。

4. 「更生保護施設における薬物依存者支援の課題と地域連携体制のあり方に関する研究」 (研究分担者: 森田展彰)

本分担研究班では、国内各地の更生保護施設入所者400事例の縦断的調査を行った結果、施設入所による教育により、薬物関連問題尺度の生活困難の得点やK6得点の低下が認められた。また、更生保護施設での支援を受けて就労や子育てで精神的なつらさを乗り越える生活上の自信を高めることができおり、精神健康状態も改善していることが明らかになった。他方で、更生保護施設利用者の半数以上が退所後3か月時で薬物欲求を生じていると答えており、薬物依存の回復を継続する働きかけの重要性があらためて確認された。

・刑の一部執行猶予制度の対象者では、非対象者に比べて、3時点を通じてのSOCRATESの得点の低下が少ないことが確認された、同制度が薬物問題へ取り組む意識の継続に効果を上げていることが確認された。

更生保護施設の利用者の回復過程に関してTEAを用いた質的研究からは、職員の個別的な関わりをもとに自分の問題を受け止めてくれると感じたことが、生活パターンや薬物使用

における自分の感情の内省あるいは退所後に支援機関につながる力を育むことにつながっていることが示された。

なお、更生保護施設の職員と関連機関の関係者を集めた意見交換会で意見聴取をもとに、多職種多機関の連携を円滑にするためのポイントをまとめたパンフレット作成を行った。

5. 「薬物依存症者への就労支援のあり方に関する研究」(研究分担者: 引土絵未)

本分担研究班では、薬物依存症当事者へのインタビュー調査の質的分析、ならびに、米国ニューヨーク州における物質使用障害に対する治療と職業訓練の統合システムでのヒアリング調査から、次のことが示唆された。すなわち、依存症特性に配慮した連携については、支援者個人および機関の価値観や経験に資するものではなく、確立された資源としてテキストやワークブックの開発を通して、就労支援従事者、依存症支援者の相互理解を深めるとともに、支援に繋がっていない当事者や家族が就労について理解を深める機会を提供する必要があること、就労後のフォローアップ体制を整備することを通して、依存症に関する情報を開示するか否かの選択肢を提供することが目指されるが、薬物依存症者の就労継続を支援する財源が確保されていない現状において、財政基盤に関する検討が必要となることである。

さらに、3つの課題も確認できた。第1に、情報開示である。わが国では、現状、薬物関連問題を非公表にすることにより就労機会を確保せざるを得ないのが大半であり、薬物依存症者が自分自身で情報開示について選択するには、薬物関連問題に対する誤解や偏見を解消するための啓発が重要である。第2に、薬物関連問題を持つ人に対する誤解・偏見の解消である。現状では、薬物事犯者(特に累犯)の受け入れる協力雇用主が少ない。そして最後な、フォロ

ーアップ体制の充実である。薬物関連問題を持つ人の就労継続においては、依存症回復支援施設や就労支援機関、または薬物事犯者を受け入れている協力雇用主などによるフォローアップ体制が重要であるが、現状では、ボランティアな取り組みにとどまっている。今後はその財源や制度的基盤について検討する必要がある。

なお、最終年度では、代表的なカテゴリーについて「薬物関連問題をもつ人の就労支援ガイド」としてまとめ、ニューヨーク州の雇用リソース開発チームで開発された雇用リソースブックを基盤とし「薬物関連問題をもつ人と就労のためのワークブック」を作成した。

6. 「司法と福祉の連携による薬物依存症者への地域支援とその回復過程に関する質的研究」 (研究分担者: 高橋康史)

本分担研究班における3年間の研究活動からは、以下の4つのことが明らかにされた。

第1に、障害福祉サービスの活用により、薬物依存症者の地域生活支援が行われ、その支援が薬物再使用を阻止することに寄与していることが明らかにされた。このことから、ポジティブ/ストレングスな視点から、薬物依存症者に関わることでできる社会福祉による支援の有効性が確認された。また、地域生活定着促進事業の下で、薬物依存症者が支援を受けるには特別調整に該当することが前提条件であったが、現在は、一般調整による支援を実施していることが明らかになった。

第2に、地域生活定着支援センターによる支援を受けた薬物依存症者の予後についてのインタビュー調査をSCATで分析した結果、「薬物依存症」特有のニーズに対するスペシフィックな観点からのアプローチよりも、障害者総合支援法による地域支援を得ることで、地域生活を営む1人の人間として支援を受けることが重要であると示唆された。

第3に、司法領域における薬物処遇プログラムを実施する看護師を対象としたインタビュー調査では、SMARPPが単に、薬物依存症からの回復を促すだけでなく、SMARPPを行う場が司法の領域から地域社会へ移行するための1つの「居場所」となることが示唆された。

そして最後に、薬物依存症者に対するインタビュー調査と共にMAXqdaを用いて実証的に解析した結果、薬物依存症者という当事者から、多様な役割の変化のプロセスが明らかになった。そして、それが、ポジティブ/ストレングスな視点を活かした薬物依存症からの回復の1つのルートとなりうる可能性も見出すことができた。

D. 考察

本研究班では、①すでに実施してきた保護観察所および民間支援団体における薬物依存症者コホート研究をさらに継続・拡大し、②地域保健福祉機関および自治体関係者の薬物依存症者に対する支援力を高めるべく、実態調査と研修を実施した。また、③更生保護施設の支援の実態を明らかにすべく調査を実施し、④民間回復施設における就労支援の実態と課題を検討した。さらに、地域生活定着支援センターを利用する薬物依存症当事者に対するインタビューを実施し、当事者の視点から見た地域支援の効果と課題を検討した。

その結果、薬物問題を抱える保護観察対象者のコホート調査(VBP)は、順調に対象者と調査実施エリアを拡大することができ、VBPを通じて、精神保健福祉センターを起点とした、保護観察対象者の地域支援体制を国内各地に構築されつつある。今年度は、コロナ禍の影響で保護観察所における対象者リクルートが停滞したことへの対策として、法務省との協議に

より、2021年10月以降、刑務所釈放前教育時にも対象候補者に本プロジェクトに関する情報提供を実施するようになった。これにより「矯正施設—保護観察—地域精神保健福祉」のつながりが実現した。今後も対象者と調査実施エリアの拡大に努めつつプロジェクトを継続し、国内の多くの地域に「声の架け橋（voice-bridges）を作っていく予定である。

「ダルク追っかけ調査」においては、薬物依存症者を対象とする縦断研究としては、現時点では国内随一の規模を誇り、そのデータから、今年度は覚せい剤依存症者の断薬継続と自助グループ参加頻度との正の相関関係が明らかにされた。このコホート研究では、対象者を最長5年間追跡する計画であり、今後も臨床的・行政的・学術的に意義の高いエビデンスを多数創出することが期待されている。

また、自治体の生活保護担当者の支援技術向上を目的とした研修の効果については、すでに昨年度、支援力の向上、ならびに薬物依存症者に対する忌避的感情の低減に資することが確認されていたが、今年度、その効果は研修終了6ヶ月後にも維持されていることが確認された。今後、本研修プログラムのパッケージ化と全国への普及を促進し、生活保護担当ケースワーカーに対する継続的な支援技術の向上を目指す計画である。また、精神保健福祉センターにおけるSMARPP等の回復プログラム、家族プログラムの普及率は7割に達し、数年前とは明らかに隔世の感があるものの、今年度の調査では、コロナ禍の影響でプログラム実施施設に若干の減少が確認された。今後も進捗をモニタリングしつつ、普及・均てん化に努め、国内の隅々までの支援ネットワークを広げたい。

更生保護施設利用者の縦断調査、ならびに施設職員へのインタビュー調査からは、刑の一部執行猶予制度が対象者の問題意識に好ましい影響を与えており、施設退所後も社会資源の利

用可能性を高めている可能性が示唆された。また、更生保護施設でのSMARPP実施により、職員の意識が、従来の「指導・教育」重視のスタンスから、「安心・安全の関係性」重視のスタンスへと移行していることも確認された。今年度は、意見交換会で出た疑問や質問を中心に、「更生保護施設支援者を対象としたパンフレット」を開発し、国内各地の更生保護施設に配付した。これまで地域精神保健福祉の分野では光が当たらなかった更生保護施設をフィールドにした研究活動は、それ自体が施設職員の意識や文化に好ましい影響を与え、ひいては利用者の再犯防止に資するものと考えている。

民間回復施設の就労支援に関する調査からは、今年度は、テキストやワークブックを開発し、個人の尽力によらない構造化された就労支援開の必要性が明らかになり、また、薬物依存症者の就労支援を可能なら占める財源確保の必要性も確認された。今年度は、3年間の調査結果を踏まえ、「薬物関連問題をもつ人の就労支援ガイド」としてまとめ、国内の就労支援機関に配布した。また、ニューヨーク州の雇用リソースブックを参考にして、分担班独自に「薬物関連問題をもつ人の就労ワークブック」も開発した。今後、依存症から依存症回復支援の1つの「出口」として就労の意義をさらに声を大にして主張していく必要がある。

地域生活定着支援センターを利用した薬物依存症者の調査からは、次の3点が明らかにされた。第1に、障害者総合支援法を中心とした障害者福祉サービスの活用による地域支援の有用性が確認された。第2に、司法から地域への移行を促す「居場所」としての保護観察所処遇プログラムの意義が確認された。そして最後に、薬物依存症者当事者および回復に向けたポジティブ/ストレングスな視点からの支援においては、対人援助レベルだけでなく、制度・社会構造的な次元において、薬物依存症者の

「強さ」を引き出す為の仕組み作りが求められることが明らかになった。

本研究班における3年間の研究活動では、エビデンスを創出するだけにとどまらず、研究活動の一環として開催された研修会や意見交換会を通じて、薬物依存症者の地域支援体制の構築を推進するに貢献することができた。その意味で、本研究班の研究活動全体が、地域を耕し、支援者を育てるアクション・リサーチとしての機能を持っていたとえるだろう。そして、その活動は、ごく近い将来、薬物依存症者支援を通じて国民の健康増進に資するだけでなく、薬物依存症者の再犯防止につながることで社会安全維持にも貢献し、さらには、近い将来行われるであろう、「刑の一部執行猶予制度」の見直しにも資する基礎資料として高い価値を持つと自負している。

E. 結論

本研究班では、①すでに実施してきた保護観察所および民間支援団体における薬物依存症者コホート研究をさらに継続・拡大し、②地域保健福祉機関および自治体関係者の薬物依存症者に対する支援力を高めるべく、実態調査と研修を実施した。また、③更生保護施設の支援の実態調査とともに、地域連携に資するパンフレットの開発と配布を行い、④民間回復施設における就労支援の実態と課題を検討するとともに、「薬物関連問題をもつ人の就労ワークブック」を開発した。さらに、⑤地域生活定着支援センターを利用者調査からは、司法領域から地域支援に移行する際の課題を整理した。

本研究班終了後も、いくつかの分担課題については研究活動、研修会、意見交換会を継続し、薬物依存症者の地域支援体制の構築を推進する予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

令和元年度

- 1) Hiroko Kotajima-Murakami¹, Ayumi Takano, Yasukazu Ogai, Shotaro Tsukamoto, Maki Murakami, Daisuke Funada, Yuko Tanibuchi, Hisateru Tachimori, Kazushi Maruo, Tsuyoshi Sasaki, Toshihiko Matsumoto, Kazutaka Ikeda: Study of effects of ifenprodil in patients with methamphetamine dependence: Protocol for an exploratory, randomized, double-blind, placebo-controlled trial. *Neuropsychopharmacology Reports*. 2019 January 20. doi:10.1002/npr2.12050.
- 2) Daisuke Funada, Toshihiko Matsumoto, Yuko Tanibuchi, Yasunari Kawasoe, Satoru akibara, Nobuya Naruse, Shunichiro Ikeda, Takashi Sunami, Takeo Muto, Tetsuji Cho : Changes of clinical symptoms in patients with new psychoactive substance (NPS)-related disorders from fiscal year 2012 to 2014: A study in hospitals specializing in the treatment of addiction . *Neuropsychopharmacology Reports*. 2019;1–11.doi: 10.1002/npr2.12053.

- 3) Ayumi Takano, Sachiko Ono, Hayato Yamana, Hiroki Matsui, Toshihiko Matsumoto, Hideo Yasunaga, Norito Kawakami : Factors associated with long-term prescription of benzodiazepine: a retrospective cohort study using a health insurance database in Japan. *BMJ Open* 2019;9:e029641. doi:10.1136/bmjopen-2019-029641
- 4) Ayumi Takano, Yuki Miyamoto, Tomohiro Shinozaki, Toshihiko Matsumoto, Norito Kawakami: Effect of a web-based relapse prevention program on abstinence among Japanese drug users: A pilot randomized controlled trial. *Journal of Substance Abuse Treatment* 111: 37-46, 2020.
- 5) 大澤ちひろ, 伊藤絵美, 三浦文華, 風岡公美子, 伴恵理子, 小畑輝海, 松本俊彦: 更生保護施設における女性覚せい剤乱用者の心理社会的特徴. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 54(3) : 136-155, 2019.
- 6) 大宮宗一郎, 谷淵由布子, 石田恵美, 柳友里, 山口拓洋, 藤井実, 吉永宏太郎, 林偉明, 関谷希望, 田畑聡, 白川雄一郎, 堀口忠利, 森田展彰, 斎藤環, 奥村太一, 近藤あゆみ, 松本俊彦: 精神保健福祉センターにおいて薬物再乱用防止プログラムを提供することの意義—プログラム参加時点の参加者の特徴を踏まえた考察—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 54(3) : 120-135, 2019.
- 7) 高木のり子, 太田晴久, 池田明広, 高塩理, 松本俊彦: 多職種チームによる個別介入とワークブックを用いた認知行動療法をワンパッケージ化したプログラムの実践—うつ病とアルコール問題を併せ持つ者への介入法の検討から—. *精神科治療学* 34(11) : 1323-1330, 2019.
- 8) 嶋根卓也, 高橋哲, 竹下賀子, 小林美智子, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 近藤あゆみ, 高野洋一, 山本麻由子, 松本俊彦: 覚せい剤事犯者における薬物依存の重症度と再犯との関連性: 刑事施設への入所回数からみた再犯. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 54(5) : 211-221, 2019.
- 9) 松本俊彦: 精神科医療における過量服薬の現状と課題. *臨床精神薬理* 22(3) : 231-241, 2019.
- 10) 松本俊彦: 依存症のメカニズム: 人はなぜ薬物依存症になるのか? *臨床麻酔* 43 臨時増刊号 : 339-346, 2019.
- 11) 松本俊彦, 近藤あゆみ, 引土絵未, 高野 歩, 熊倉陽介: 薬物使用障害に対する心理社会的支援—薬物依存研究部の挑戦. *精神保健研究* 65 : 17-26, 2019.
- 12) 松本俊彦: 「ハマる」の来し方・行く末—アディクション概念の変遷について—. *こころの科学* 205 特別企画 行動のアディクション : 18-25, 2019.
- 13) 今村扶美, 松本俊彦: 物質使用障害のケースフォーミュレーション. *精神療法 増刊第6号 ケースケースフォーミュレーションと精神療法の展開* : 161-170, 2019.
- 14) 松本俊彦: 市販薬 (OTC 薬) 乱用・依存の現状と防止に向けた課題. 2019 年度 医薬品・医療機器等安全性情報 No.365 : 17-21, 2019.
- 15) 松本俊彦: なぜベンゾジアゼピンが問題なのか. *治療* 101 : 1091-1094, 2019.
- 16) 松本俊彦: 薬物依存症の地域支援に必要なものとは. *罪と罰* 56(4) : 5-18, 2019.
- 17) 宇佐美貴士, 松本俊彦: 一般用医薬品 (OTC) の使用障害 (解熱鎮痛薬, 鎮咳薬). *精神科治療学* 34 増刊号 : 35-37, 2019.

- 18) 松本俊彦: 薬物依存症の地域支援に必要なものは何か. 都市問題 110(11) : 4-11, 2019.
- 19) 松本俊彦: 刑の一部執行猶予制度以降の薬物依存症地域支援. 日本アルコール関連問題学会雑誌 21(1) : 143-148, 2019.
- 20) 松本俊彦: 全国精神科病院調査から見た大麻関連精神疾患の臨床的特徴—ほかの薬物関連精神疾患との関係から—. 週刊医学のあゆみ 271(11) : 1193-1199, 2019.
- 21) 松本俊彦: ハーム・リダクションの理念とわが国における可能性と課題. 精神神経学雑誌 121(12) : 914-925, 2019.
- 22) 松本俊彦: 措置入院における治療・支援の課題～薬物依存症治療を専門とする立場から～. 日本精神神経科診療所協会誌ジャーナル : S58-S64, 2019.
- 23) 松本俊彦: 思春期の薬物乱用—市販薬(OTC薬)乱用を中心に—. 思春期学 37(4) : 323-330, 2019.
- 24) 松本俊彦, 高野歩, 熊倉陽介, 宇佐美貴士, 伴恵理子, 窪田和巳: 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発: 「Voice Bridges Project」. 更生保護学研究 14 : 3-18, 2019.
- 25) 松本俊彦: 薬物依存症からの回復のために医療者は何ができるか. 新薬と臨牀 69(1) : 29-32, 2020.
- 26) 村田雄一, 天野英浩, 杉田智美, 田中優, 渡邊理恵, 森田三佳子, 平林直次, 松本俊彦: 薬物依存症治療における作業療法士の試み. 新薬と臨牀 69(1): 41-46, 2020.
- 27) 松本俊彦: 薬物依存症. 今日の処方 改訂第6版, 南江堂, 東京, pp475-477, 2019.
- 28) 松本俊彦: 薬物乱用. 小児科診療ガイドライン—最新の診療指針—第4版 編集: 五十嵐隆, 総合医学社, 東京, pp687-691, 2019.
- 29) 松本俊彦: 認知行動療法. アディクションサイエンス 依存・嗜癖の科学, 朝倉書店, 東京, pp218-226, 2019.
- 30) 松本俊彦: 「やりたい」「やってしまった」「やめられない」—薬物依存症の心理. 「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか, 日本評論社, 東京, pp54-67, 2019.
- 31) 松本俊彦: 薬物依存症と治療プログラム, 今日の治療指針 私はこう治療している, 医学書院, 東京, pp1055-1056, 2020.
- 32) 松本俊彦: 薬物使用障害に対する外来治療プログラム「SMARPP」. 物質使用障害の治療 多様なニーズに応える治療・回復支援, 金剛出版, 東京, pp73-88, 2020.
- 33) 嶋根卓也, 邱冬梅, 和田清: 日本における大麻使用の現状: 薬物使用に関する全国住民調査 2017 より, YAKUGAKU ZASSHI, 140(2), 173-178, 2020.
- 34) 嶋根卓也: 過量服薬に対する薬剤師の役割. 臨床精神薬理 22(3), 293-299, 2019.
- 35) 嶋根卓也, 猪浦智史: わが国における大麻使用の動向-全国規模の疫学調査の結果から、医学のあゆみ 271(11), 1187-1191, 2019.
- 36) 嶋根卓也: 国内外における大麻使用経験率-疫学調査から-, 精神科治療学 35(1), 5-12, 2020.
- 37) 嶋根卓也: 「NO」と言えない子どもたち—酒・タバコ・クスリと援助希求. 「助けて」が言えない SOS を出さない人に支援者は何ができるか (松本俊彦編), 日本評論社, pp92-101, 2019.
- 38) 山田理沙, 嶋根卓也, 船田正彦: レクリエーショナル・セッティングにおける危険ドラッグ使用パターンの男女別検討. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(6), 272-285, 2020.

- 39) 谷真如, 高野洋一, 高宮英輔, 嶋根卓也 : 覚せい剤取締法違反により刑事施設に入所した刑の一部執行猶予者の心理・社会的特徴. *Jap.J.Crim.Psychol*, 57(2), 1-15, 2020.
- 40) 森田展彰, 渡邊敦子, 新井清美, 小池純子, 望月明見, 大宮宗一郎, 受田恵理, 山田理絵: 更生保護施設における薬物事例犯への支援に関する研究, *更生保護学研究* 15:4-18, 2019.
- 41) 森田展彰: 物質使用障害に伴うさまざまなリスクとその対応 アディクションサイエンス依存嗜癖の科学, 朝倉書店 pp237-247, 2019.6.1.
- 42) 森田展彰: 薬物依存報道へのガイドライン, *心と社会* 50(3): 46-53, 2019.
- 43) 新田千枝, 井ノ口恵子, 他 森田展彰 : 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者の地域支援-更生保護施設を中心とした意見交換会-その 1-日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(4) 217, 2019.10.
- 44) 井ノ口恵子, 新田千枝, 森田展彰 他 : 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者の地域支援-更生保護施設を中心とした意見交換会-その 2 日本アルコール・薬物 医学会雑誌 54(4) 218 , 2019.10.
- 45) 引上絵未: 薬物依存症者に対する就労支援. *臨床精神医学* 48(11) : 1285-1289, 2019.
- 46) 高橋康史 : 「刑余者の地域生活支援に関する事例研究——ワーカー／クライアント関係に注目して」『人間文化研究』31, 39-56, 2019.
- 47) 高橋康史・市川岳仁・朴希沙 : 「依存症専門家養成に関する反省的考察——韓国依存症者専門家協会の取り組みに学ぶ」『人間文化研究』33, 1-14, 2020.
- 48) Ayumi Takano, Yuki Miyamoto, Tomohiro Shinozaki, Toshihiko Matsumoto, Norito Kawakami: Effect of a web-based relapse prevention program on abstinence among Japanese drug users: A pilot randomized controlled trial. *Journal of Substance Abuse Treatment* 111: 37-46, 2020.
- 49) Toshihiko Matsumoto, Toshitaka Kawabata, Kyoji Okita, Yuko Tanibuchi, Daisuke Funada, Maki Murakami, Takashi Usami, Rie Yokoyama, Nobuya Naruse, Yuzo Aikawa, Aizo Furukawa, Chie Komatsuzaki, Nozomu Hashimoto, Osamu Fujita, Aiko Umemoto, Ariyuki Kagaya, Takuya Shimane: Risk factors for the onset of dependence and chronic psychosis due to cannabis use: Survey of patients with cannabis-related psychiatric disorders. *Neuropsychopharmacol Rep.* 2020; 00: 1-10. <https://doi.org/10.1002/npr2.12133>
- 50) Inoura S, Shimane T, Kitagaki K, Wada K, Matsumoto T: Parental drinking according to parental composition and adolescent binge drinking: findings from a nationwide high school survey in Japan. *BMC Public Health.* 2020;20(1):1878. <http://doi.org/10.1186/s12889-020-09969-8>.
- 51) Ayumi Kondo, Takuya Shimane, Masaru Takahashi, Yoshiko Takeshita, Michiko Kobayashi, Yuriko Takagishi, Soichiro Omiya, Youichi Takano, Mayuko Yamaki, Toshihiko Matsumoto: Gender Differences in Triggers of Stimulant Use Based on the National

- Survey of Prisoners in Japan. Subst Use Misuse. 2020 Oct 24:1-7. doi: 10.1080/10826084.2020.1833930
- 52) Masahiro Takeshima, Tempei Otsubo, Daisuke Funada, Maki Murakami, Takashi Usami, Yoshihiro Maeda, Taisuke Yamamoto, Toshihiko Matsumoto, Takuya Shimane, Yumi Aoki, Takeshi Otowa, Masayuki Tani, Gaku Yamanaka, Yojiro Sakai, Tomohiko Murao, Ken Inada, Hiroki Yamada, Toshiaki Kikuchi, Tsukasa Sasaki, Norio Watanabe, Kazuo Mishima, Yoshikazu Takaesu: Does cognitive behavioral therapy for anxiety disorders assist the discontinuation of benzodiazepines among patients with anxiety disorders? A systematic review and meta-analysis. Psychiatry Clin Neurosci. 2021 Jan 15. doi: 10.1111/pcn.13195. Online ahead of print.
- 53) Risa Yamada, Takuya Shimane, Ayumi Kondo, Masako Yonezawa, Toshihiko Matsumoto: The relationship between severity of drug problems and perceived interdependence of drug use and sexual intercourse among adult males in drug addiction rehabilitation centers in Japan. Subst Abuse Treat Prev Policy. 2021 Jan 7;16(1):5. doi: 10.1186/s13011-020-00339-6.
- 54) 今井航平, 浅見隆康, 松本俊彦: 依存症家族支援プログラム GIFT の有効性に関する検討. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(6) : 247-259, 2020.
- 55) 宇佐美貴士, 松本俊彦: 10代における乱用薬物の変遷と薬物関連精神障害患者の臨床的特徴. 精神医学 62(8): 1139-1148, 2020.
- 56) 松本俊彦: 特別企画: 「依存症が社会に与えるインパクト」に寄せて. ストレス科学 34(3) : 153, 2020.
- 57) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか. ストレス科学 34(3) : 154-160, 2020.
- 58) 松本俊彦: 薬物依存症の対策. 日本医師会雑誌 特集 痛みの診断と治療最前線 149(1) : 56, 2020.
- 59) 松本俊彦: 麻酔科医の薬物依存 徹底分析 シリーズ 誰に相談したらよいか 救いの道は, ある. Lisa 27(4) : 432-437, 2020.
- 60) 松本俊彦: 薬物依存症と孤立. 精神科治療学 35(4) : 385-390, 2020.
- 61) 松本俊彦: 十代の自殺死亡率. 小児内科 52(5) : 657-660, 2020.
- 62) 松本俊彦: ハームリダクションについて. 精神科治療学 35(5) : 541-545, 2020.
- 63) 村上真紀, 松本俊彦: Self-harm in over8s: long-term management (NICE clinical guideline,CG133). 精神医学 62(5)増大号 : 775-778. 2020.
- 64) 松本俊彦, 今村扶美: 薬物依存症—認知行動療法の手法を活用した依存症集団療法 「SMARPP」. 西晋療法 増刊第7号:136-147, 2020.
- 65) 松本俊彦: 依存症は「孤立の病」アディクションの対義語はコネクション. 看護 72(9) : 88-89, 2020.
- 66) 松本俊彦: 向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 中央区医師会雑誌 33 : 5-7, 2020
- 67) 松本俊彦: ゴルピデムの依存リスクは低くない. Lisa 27(7) : 676-678, 2020.
- 68) 松本俊彦: 薬物依存症の治療. CLINICAL NEUROSCIENCE 「ドラッグ」の神経科学 38(8) : 1001-1004, 2020.

- 69) 松本俊彦:麻薬中毒者届出制度の意義と課題. 精神神経学雑誌 122(8) : 602-6069, 2020.
- 70) 宇佐美貴士, 松本俊彦:2. 物質関連障害および嗜癖性障害群 1)物質関連障害. 臨床精神医学 49(8) : 1219-1226, 2020.
- 71) 松本俊彦:行動嗜癖と物質依存症. 日本医師会雑誌 149(6) : 10471-1044, 2020.
- 72) 松本俊彦:依存症から物質使用障害・嗜癖性障害へ. 精神科治療学 35(9):1005-1009, 2020.
- 73) 松本俊彦:保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究―「声の架け橋」プロジェクト (Voice Bridge Projects). 刑法雑誌 59(3) : 432-439, 2020.
- 74) 松本俊彦:アルコールとうつ、自殺 「死のトライアングル」に引き込まれないために. 月刊保団連 1334 : 4-10, 2020.
- 75) 松本俊彦:薬物使用者を支える地域づくり ハームリダクションに依拠した薬物使用者の支援. 公衆衛生 84(12) : 801-806, 2020.
- 76) 沖田恭治, 松本俊彦:アディクションに関わる不安とその対応. 精神科治療学 35(12) : 1349-1354, 2020.
- 77) 松本俊彦:「津久井やまゆり園」入所者殺傷事件に見る, 障害者差別・偏見を生み出す背景. 保健師ジャーナル 77(1):39-43, 2021.
- 78) 松本俊彦:物質使用症. 研修医の為の精神科ハンドブック, 医学書院, 東京, pp57-59, 2020.
- 79) 松本俊彦:精神医学の観点から見た裁判での議論. パンドラの箱は閉じられたのか, 創出版, 東京, pp170-175, 2020.
- 80) 松本俊彦:心はなぜアディクションに捕捉されるのか―痛みと孤立と嘘の精神病理学. アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす 13 章, 日本評論社, 東京, pp12-25, 2020.
- 81) 松本俊彦:なぜハームリダクションが必要なのか―つながりと包摂の公衆衛生政策. アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす 13 章, 日本評論社, 東京, pp116-139, 2020.
- 82) 松本俊彦:愚痴は生きのびるための技術だ. 「死にたい」「消えたい」と思ったことがあるあなたへ, 河出書房新社, 東京, pp63-72, 2020.
- 83) 嶋根卓也, 邱 冬梅, 和田 清:日本における大麻使用の現状:薬物使用に関する全国住民調査 2017 より, YAKUGAKU ZASSHI, 140(2),173-178, 2020.
- 84) 嶋根卓也. 薬物乱用状況のアップデート:薬物使用に関する全国住民調査2019より. Newsletter KNOW (麻薬・覚せい剤乱用防止センター)、第 103 号、p2-5,2020.
- 85) 嶋根卓也:薬物依存症者の理解とサポート、法律のひろば 74(1), 57-66, 2021.
- 86) 嶋根卓也:薬物乱用防止のために地域の薬局ができること、調剤と情報 27(1), 89-96,2021.
- 87) 嶋根卓也:第 8 章 性的マイノリティ・HIV 感染者の理解と支援. 物質使用障害の治療 多様なニーズに応える治療 回復支援 (松本俊彦編著), 金剛出版, 東京, pp141-155, 2020.
- 88) 嶋根卓也:第 12 章 薬物乱用防止教育とスティグマ. アディクション・スタディーズ 薬物依存症を捉えなおす 13 章(松本俊彦編), 日本評論社, pp201-214, 2020.
- 89) 山田理沙, 嶋根卓也, 船田正彦:レクリエーションナル・セッティングにおける危険ドラッグ使用パターンの男女別検討, 日本アルコール・薬物医学会雑誌 54(6), 272-285,

- 2020.
- 90) 谷真如, 高野洋一, 高宮英輔, 嶋根卓也: 覚せい剤取締法違反により刑事施設に入所した刑の一部執行猶予者の心理・社会的特徴, *犯罪心理学研究*, 57(2), 1-15, 2020.
- 91) 片山宗紀, 白川教人, 藤城聡, 田辺等, 小泉典章, 増茂尚志, 小原圭司, 本田洋子, 馬場俊明, 松浦良昭, 山田貴志: 専門家と薬物依存症当事者による協働的な研修が生活保護担当ケースワーカーの薬物依存症の支援態度に与える影響, *日本アルコール関連問題学会雑誌*, 21(2), 54-59, 2029.
- 92) 渡邊敦子, 森田展彰, 受田恵理, 安里明友美, 小池純子, 新井清美, 井ノ口恵子: 更生保護施設における薬物事犯者に対する地域支援—刑の一部執行猶予制度導入後の施設の利用実態—. *法と心理* 20(1): 150-158.2020.
- 93) 森田展彰: 第7章 ト라우マ関連問題を背景に持つ薬物依存症に対するプログラム女性事例を中心とした支援. 物質使用障害の治療 多様なニーズに応える治療回復支援 (松本俊彦編集), 金剛出版, 東京, pp119-139, 2020.
- 94) 森田展彰: 第3章 社会現象としての依存症 薬物依存が社会に与える損傷(ハーム)を最小化するためには?—「ダメ, 絶対」から回復支援へ—. *現代社会とメンタルヘルス* (中谷陽二, 斎藤環, 森田展彰, 小西聖子編集), 星和書店, 東京, pp151-162, 2020.
- 95) 高橋康史・市川岳仁・船山健二・安田恵美: 薬物依存の課題を抱える出所者への地域支援に関する研究——地域生活定着支援センターの取り組みから. *人間文化研究* 35, 35-49, 2021.
- 96) 高橋康史: 高齢者に対する地域の福祉と再犯防止——社会福祉の拡大と限定をめぐって. *再犯防止から社会参加へ——ヴァルネラビリティから捉える高齢者犯罪* (金澤真理・安田恵美・高橋康史編), 日本評論社, 東京, 137-165, 2021.
- 令和3年度
- 97) Toshihiko Matsumoto, Takashi Usami, Taisuke Yamamoto, Daisuke Funada, Maki Murakami, Kyoji Okita, Takuya Shimane: Impact of COVID-19-related stress on methamphetamine users in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*. 2021 Apr 19. doi: 10.1111/pcn.13220.
- 98) Shimane T, Takahashi M, Kobayashi M, Takagishi Y, Takeshita Y, Kondo A, Omiya S, Takano Y, Yamaki M, Matsumoto T. Gender Differences in the Relationship between Methamphetamine Use and High-risk Sexual Behavior among Prisoners: A Nationwide, Cross-sectional Survey in Japan. *J Psychoactive Drugs*. 2021 May 12:1-9. doi: 10.1080/02791072.2021.1918805. Epub ahead of print. PMID: 33977855."
- 99) Chika Yamada, Kristiana Siste, Enjeline Hanafi, Youdiil Ophinni, Evania Beatrice, Vania Rafelia, Peter Alison, Albert Limawan, Tomohiro Shinozaki, Toshihiko Matsumoto, Ryota Sakamoto. (2021). Relapse prevention group therapy via video-conferencing for substance use disorder: protocol for a multicentre randomised controlled trial in Indonesia. *BMJ Open* 11, e050259. <https://doi.org/10.1136/bmjopen-2021-050259>

- 100) Kyoji Okita, Koichi Kato, Yoko Shigemoto, Noriko Sato, Toshihiko Matsumoto, Hiroshi Matsuda: Effects of an Adenosine A2A Receptor Antagonist on Striatal Dopamine D2-type Receptor Availability: A Randomized Control Study using Positron Emission Tomography. *Front. Neurosci.*, 13 September 2021 | <https://doi.org/10.3389/fnins.2021.729153>
- 101) 松本俊彦 : 10代の薬物乱用・依存. *こころの科学* 217 : 43-49, 2021.
- 102) 松本俊彦 : COVID-19と社会的孤立、依存症の臨床を中心に. *日本社会精神医学会雑誌* 30(2) : 167-173, 2021.
- 103) 松本俊彦 : 精神科救急で違法薬物が検出されたときの対処. *精神科 Resident* 2(2) : 13-14, 2021.
- 104) 松本俊彦 : アルコール関連問題への対応. *産業精神保健* 29 特別号 : 104-107, 2021.
- 105) 松本俊彦 : 薬物依存症の今—乱用薬物の動向と今後の課題—. *Animus* 107:32-37, 2021.
- 106) 松本俊彦 : 保護観察所—保護観察所と精神保健福祉センターが連携した新しい薬物依存症地域支援システム—. *精神科治療学* 36(7) : 825-829, 2021.
- 107) 松本俊彦 : アディクションと複雑性PTSD. *精神療法* 47(4) : 475-477, 2021.
- 108) 松本俊彦 : 依存症は「孤立の病」—アディクションの対義語はコネクション—. *月刊福祉* 104(11) : 42-45, 2021.
- 109) 松本俊彦 : 特集 ハームリダクションとは何か?—その理念と意義, わが国での実施. *週刊 日本医事新報* 5081 : 18-30, 2021.
- 110) SHIMANE Takuya, INOURA Satoshi, MATSUMOTO Toshihiko : Proposed indicators for Sustainable Development Goals(SDGs) in drug abuse fields based on national data from Japan. *保健医療科学* 70(3) : 252-261, 2021.
- 111) 松本俊彦 : ひとはなぜ「ドラッグ」を恐れ、嫌悪するのか. *こころの科学* 220 : 58-64, 2021.
- 112) 宇佐美貴士, 松本俊彦 : 3. 鎮静薬, 睡眠薬または抗不安薬使用症群. *精神科治療学 今日*の精神科治療ハンドブック 36 増刊号 : 164-165, 2021.
- 113) 松本俊彦 : COVID-19の依存症への影響—薬物依存症外来から見えた風景を中心に—. *医療の広場* 61(11) : 4-7, 2021.
- 114) 松本俊彦 : わが国において薬物依存症に対する薬物療法の導入を妨げているものは何か? *臨床精神薬理* 24 : 1191-1199, 2021.
- 115) 松本俊彦 : 依存症. *精神医学* 63(11) : 1683-1690, 2021.
- 116) 松本俊彦 : わが国におけるハームリダクション政策の可能性と課題. *精神科臨床 Legato* 7(3) : 60-62, 2021.
- 117) 松本俊彦 : 人はなぜ薬物依存症になるのか—コネクションの対義語としてのアディクション—. *学鏡* 118(4) : 30-33, 2021.
- 118) 松本俊彦 : C 物質依存と精神保健福祉. *系統看護学講座 別冊 精神保健福祉*, 医学書院, 東京, pp265-279, 2021.
- 119) 松本俊彦 : 薬物依存症から回復しやすい社会づくり・地域づくり. *格差時代の医療と社会的処方—病院の入り口に立てない人々を支える SDH (健康の社会的決定要因) の視点*, 日本看護協会出版会, 東京, pp170-181, 2021.

- 120)宮地尚子, 松本俊彦: ト라우マと依存症臨床の未来. 感情島へようこそ ト라우マのポリフォニー, 日本評論社, 東京, pp207-227, 2021.
- 121)松本俊彦: 大麻の取り締まりは健康問題であり、政治問題. 日本人のための大麻教科書 「古くて新しい農作物」の再発見, イースト・プレス, 東京, pp122-127, 2021.
- 122)松本俊彦: 物質使用症と接触症群. 講座精神疾患の臨床 4 身体的苦痛症群 解離症群 心身症 食行動症または摂食症群, 中山書店, 東京, pp303-308, 2021.
- 123)松本俊彦: 乱用薬物の実態と診断. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp172-180, 2021.
- 124)松本俊彦: 覚せい剤. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp181-184, 2021.
- 125)松本俊彦: 薬物依存症と併存精神障害—自己治療仮説に基づく理解—. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp195-200, 2021.
- 126)松本俊彦: 覚醒剤依存の治療上の留意点. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp215-219, 2021.
- 127)松本俊彦: 患者の違法薬物使用を知った場合の司法的対応. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで. 文光堂, 東京, pp305-308, 2021.
- 128)松本俊彦: 依存症・自傷「やめられない・止まらない」の臨床. 精神症状の診かた・聴きかた はじめてまなぶ精神病理学, 金剛出版, 東京, pp161-188, 2021.
- 129)松本俊彦: 逸脱行動への認知行動療法(薬物依存症を中心に). 更生保護学辞典, 成文堂, 東京, pp46-47, 2021.
- 130)嶋根卓也: 新型コロナウイルス禍の薬物依存への影響. *Frontiers in Alcoholism*9(2): 52-56, 2021.7.
- 131)嶋根卓也: 依存性薬物に関する教育の今とこれから. *保健の科学* 63(8): 513-518, 2021.8.
- 132)嶋根卓也: 違法薬物に限らない薬物依存の現状: 処方薬と市販薬の乱用・依存. *刑政* 132(10): 12-21, 2021.10.
- 133)嶋根卓也: 市販薬乱用・依存の実態とその課題. *臨床精神薬理* 24(12): 75-84, 2021.12.
- 134)嶋根卓也: 第2章-4 性的マイノリティと薬物依存症および感染症. やってみたいくなるアディクション診療・支援ガイド アルコール・薬物・ギャンブルからゲーム依存まで (松本俊彦編著), 金剛出版, 東京, pp300-304, 2021.9.
- 135)嶋根卓也: SMARPP-24 物質使用障害治療プログラム [改訂版] (監修: 松本俊彦, 今村扶美, 近藤あゆみ) 金剛出版, 東京, 2022.1.
- 136)猪浦智史, 嶋根卓也, 加藤隆: 物質使用障害者に対する生活習慣病予防プログラムに関する予備的研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 56(5): 151-166, 2021.
- 137)湯本洋介, 嶋根卓也: ジェネラリストのための LGBT 講座 第16回物質使用障害と LGBT. *治療* 103(7): 2-6, 2021.7.
- 138)渡邊敦子, 井ノ口恵子, 受田恵理, 新井清美, 森田展彰, 安里明友美: 更生保護施設における薬物事犯者に対する地域支援—職員が認識する刑の一部執行猶予制度導

- 入の効果と課題一. 更生保護研究 19 : 4-14, 2021
- 139) 高橋康史, 大山真澄, 今野貴矢 : 薬物依存の課題を抱える者の地域における生活再建に関する考察—障害者福祉サービス活用の可能性と課題. 都市と社会 6 : 186-194, 2022.
- 140) 高橋康史, 市川岳仁, 大庭拓馬 : 薬物依存者の地域支援におけるダルクの役割に関する研究—グループ・インタビュー調査をもとに. 人間文化研究 37 : 89-99, 2022.
- ## 2. 学会発表
- 令和元年度
- 1) Toshihiko MATSUMOTO , Hiroko KOTAJIMA-MURAKAMI , Ayumi TAKANO, Yasukazu OGAI, Daisuke FUNADA, Yuko TANIBUCHI, Hisateru TACHIMORI , Kazushi MARUO , Kazutaka IKEDA : Study of Ifenprodil effects on patients with methamphetamine dependence : study protocol for an exploratory randomized double-blind placebo-controlled trial. 6th Congress of Asian College of Neuropsychopharmacology, Fukuoka, 2019.11.13.
- 2) 松本俊彦 : 【分科会Ⅲ 話題提供】治療者の立場から—調査研究を踏まえて. 日本刑法学会第 97 回大会, 東京, 2019.5.25.
- 3) 松本俊彦 : 【シンポジウム 14】人はなぜ薬物依存症になるのか—ケミカルコーピングとオピオイド鎮痛薬. 第 13 回日本緩和医療薬学会年会, 千葉, 2019.6.2.
- 4) 松本俊彦 : 【シンポジウム 55】麻薬中毒者届出制度の意義と課題. 第 115 回日本精神神経学会学術総会, 新潟, 2019.6.21.
- 5) 松本俊彦 : 【招聘公演 1】人はなぜ薬物依存症になるのか? 日本ペインクリニック学会 第 53 回大会, 熊本, 2019.7.18.
- 6) 松本俊彦 : 【ランチョンセミナー1】向精神薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 第 41 回日本中毒学会総会・学術集会, 埼玉, 2019.7.20.
- 7) 松本俊彦 : 【シンポジウム 5】薬物依存症臨床から見たカフェイン関連精神障害. 第 41 回日本中毒学会総会・学術集会, 埼玉, 2019.7.21.
- 8) 松本俊彦 : 【ワークショップ 29】自傷行為の理解と援助. 日本認知・行動療法学会第 45 回大会, 愛知, 2019.9.1.
- 9) 松本俊彦 : 【分科会 1 指定発言】回復のプロセスに寄り添うリハビリテーション〜「気づき」や「つながり」を取り戻す豊かな場づくりを考える. 2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.10.4.
- 10) 松本俊彦 : 【シンポジウム 10】ハームリダクションは底つき理論を終焉させるのか. 2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.10.5.
- 11) 松本俊彦 : 【テーマセッション J】覚せい剤事犯者の社会復帰に向けた地域の役割—司法・処遇・支援の各視点から—. 日本犯罪社会学会第 46 回大会, 千葉, 2019.10.20.
- 12) 松本俊彦 : 【特別講演】人はなぜ依存症になるのか—薬物依存症からの回復に必要なもの. 第 23 回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2019.11.3.
- 13) 松本俊彦 : 【セッション I】日本における薬物問題の現状と対策の課題. 日仏医学コロク 2019, 東京, 2019.11.9.

- 14) 松本俊彦：【教育講演 1】薬物依存の現状と治療について。日本旅行医学会第 12 回東京大会，東京，2019.11.17.
- 15) 松本俊彦：【教育講演 1】人はなぜ薬物依存症になるのか？ 第 26 回日本行動医学会学術総会，東京，2019.12.6.
- 16) 松本俊彦：【市民公開講座】本当の依存症の話をしよう～つながりの病としての依存症～。第 26 回関西アルコール関連問題学会奈良大会，奈良，2019.12.22.
- 17) 松本俊彦：薬物依存症－規制強化か、回復支援か。第 30 回日本医学会総会 2019 中部，愛知，2019.4.28.
- 18) 真栄里仁，村瀬華子，松下幸生，松本俊彦，樋口進：依存症対策全国センター～全ての依存症者が等しく治療を受けられる時代を目指して～。第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.20-21.
- 19) 朝倉崇文，常岡俊昭，寺岡玲奈，緒方慶三郎，蒲生裕司，大石智，松本俊彦，宮岡等：大学病院における嗜癮障害患者に対する集団療法の特徴（北里大学東病院の場合）。第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.21.
- 20) 常岡俊昭，朝倉崇文，小野英里子，横山佐知子，川合秀明，岩見有里子，長塚雄大，山田真理，松本俊彦，岩波明：大学病院における嗜癮障害患者に対する集団療法の特徴（昭和大学附属烏山病院の場合）。第 115 回日本精神神経学会学術総会，新潟，2019.6.21.
- 21) 猪浦智史，嶋根卓也，北垣邦彦，和田清，松本俊彦：全国の高校生における両親の飲酒頻度と生徒の暴飲の関連について。2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 22) 喜多村真紀，嶋根卓也，小林美智子，近藤あゆみ，伴恵理子，大宮宗一郎，高岸百合子，松本俊彦：覚せい剤の早期使用と小児期逆境体験との関連：全国の刑務所における「薬物事犯者に関する研究」より。2019 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，北海道，2019.10.5.
- 23) Shimane T: Increase Cannabis Users in Japan: Findings from nationwide general population survey on drug use in 2017. 2019 Expert meeting on the indicator, prevalence and patterns of drug use, EMCDDA, Lisbon, Portugal, 2019.5.28-29.
- 24) Shimane T: Misuse of medicines among patients with substance use disorders in Japan: findings from Nationwide Mental Hospital Survey. Problem Drug Use (PDU) 2019 Expert meeting, EMCDDA, Lisbon, Portugal, 2019.5.27-28.
- 25) Shimane T, Tachimori H, Qiu D, Wada K : Increase cannabis users in Japan: findings from nationwide general population survey on drug use 2017. 11th Thailand Substance Abuse Conference. International Influence on Drug Abuse, Bangkok, Thailand, 2019.8.7-9.
- 26) Shimane T: Drug policy and epidemiology of drug use in Japan: results from nationwide surveys, Taiwan and Japan friendship seminar on Substance use and HIV/AIDS treatment, Tokyo, Japan, 2019.10.29.
- 27) Inoura S, Shimane T, Kitagaki K, Tachimori H, Qiu D, Wada K : Changing Trends in Substance Use among Japanese Adolescents from Nationwide Junior High School Survey . 11th Thailand Substance Abuse

- Conference. International Influence on Drug Abuse, Bangkok, Thailand, 2019.8.7-9.
- 28) 嶋根卓也: 中毒診療における薬剤師の役割. シンポジウム 4 多職種関連シンポジウム～多職種で挑む中毒診療の「わ」～. 第41回日本中毒学会総会・学術集会, 埼玉, 2019.7.21.
- 29) 嶋根卓也: 覚せい剤事犯者の入所度数と薬物依存との関連. シンポジウム 9 覚せい剤事犯者の理解とサポート. 第54回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 北海道, 2019.10.5.
- 30) 嶋根卓也: 薬物使用と生活に関する全国高校生調査 2018. シンポジウム 18 依存症の実態調査: 依存症対策全国センター平成30年度成果報告, 第54回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 北海道, 2019.10.6.
- 31) 嶋根卓也: 学校薬剤師による「ダメ、ゼツタイ」で終わらせない薬物乱用防止教室. 第52回日本薬剤師会学術大会 分科会19 「薬物乱用防止教室の原点にかえる」, 山口, 2019.10.14.
- 32) 船田正彦, 嶋根卓也, 富山健一, 三島健一: 日本における大麻使用の現状: 薬物使用に関する全国住民調査 2017 より. 一般シンポジウム S58 薬物乱用のトレンド: ポスト危険ドラッグとして的大麻問題を考える. 日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.3.23.
- 33) 山田理沙, 嶋根卓也, 船田正彦: レクリエーション・セッティングにおける危険ドラッグ使用の実態調査. 2019年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.10.5.
- 34) 引土絵未, 岡崎重人, 加藤隆, 山本大, 山崎明義, 松本俊彦, 嶋根卓也: 民間回復支援施設における治療共同体 エンカウンター・グループの効果について. 2019年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 北海道, 2019.10.5.
- 35) 片山宗紀, 白川教人, 田辺等, 小泉典章, 増茂尚志, 藤城聡, 小原圭司, 本田洋子, 馬場俊明, 松浦良昭, 山田貴志: (ポスター) 薬物依存症当事者と専門職との協働による研修が生活保護担当ワーカーの支援態度に与える影響. 2019年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 札幌, 2019. 10.4-6.
- 36) 井ノ口恵子, 小池純子, 新井清美, 望月明見, 渡邊敦子, 森田展彰: 「薬物の問題を持つ人の回復支援を看護の視点から検討する—第3弾—, 第18回日本アディクション看護学会学術集会 交流集会, 帝京科学大学, 6月30日
- 37) 井ノ口恵子, 新田千枝, 小池純子, 佐藤裕大, 山田幸子, 山田義則, 受田恵理, 渡邊敦子, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存者の地域支援—更生保護施設を中心とした意見交換会—その2, アルコール・薬物依存関連問題学会合同学術総会 札幌コンベンションセンター, 10月5日.
- 38) 新田千枝, 井ノ口恵子, 森田展彰: 刑の一部執行猶予制度下における薬物依存症者の地域支援-更生保護施設を中心とした意見交換会-その1- 他, 2019年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 札幌, 2019年10月
- 39) 森田展彰, 渡邊敦子, 望月明見, 道重さおり, 染田恵: 日本更生保護学会第8回大会シンポジウム「薬物問題のある人の回復支援に更生保護施設が果たす役割—主に地域連携と刑の一部執行猶予制度の有効性と課題—」, 2019年12月1日

- 40) 森田展彰:薬物依存症のある人の回復の包括的支援に向けた地域連携について再検討する
- 令和2年度
- 41) 松本俊彦:【ランチタイムセミナーⅡ】人はなぜ依存症になるのか? 第19回日本トラウマティック・ストレス学会, Web(オンデマンド)開催, 2020.9.21~2020.10.20.
- 42) 松本俊彦:【シンポジウム62】わが国における市販薬乱用の実態と課題. 第116回日本精神神経学会学術総会, Web(オンデマンド開催), 2020.9.29.
- 43) 松本俊彦:【シンポジウム98】摂食障害における食行動異常と物質使用との交代性サイクルは嗜癖なのか? 第116回日本精神神経学会学術総会, Web(オンデマンド開催), 2020.9.30.
- 44) 松本俊彦:【シンポジウム6】最近の精神科医療における薬物乱用の動向. 第28回日本精神科救急学会学術総会 Web(ライブ), 2020.10.10.
- 45) 松本俊彦:【シンポジウム2 精神】アディクションとトラウマ支援者が気づく事ことの意義と気づいた後にしたいことー. 第36回日本ストレス学会・学術総会, Web(オンデマンド開催), 2020.10.24.
- 46) 松本俊彦:【招待講演10】人はなぜ依存症になるのか? 日本臨床麻酔学会第40回大会, Web(オンデマンド配信), 2020.11.6~30.
- 47) 松本俊彦:【シンポジウム7】アディクション研究拠点設置において薬物依存症研究に求められるものは何か. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web開催, 2020.11.23.
- 48) 松本俊彦:【シンポジウム10】大麻使用による依存症と慢性精神病の発症リスク要因に関する研究:精神科医療施設における大麻関連精神障害患者に対する調査から. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web開催, 2020.11.23.
- 49) 松本俊彦:【シンポジウム8】精神科医療におけるベンゾジアゼピン受容体作動薬関連障害の現状と課題. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web開催, 2020.11.23.
- 50) 松本俊彦:【教育講演1】ハームリダクションとは何か~わが国の課題と可能性. 日本犯罪心理学会第58回大会, Web(オンデマンド開催), 2020.11.21~31.
- 51) リサ・ナジャヴィッツ, 松本俊彦:【対談】トラウマと薬物使用からの回復~ Seeking Safety~. 日本犯罪心理学会第58回大会, Web(オンデマンド開催), 2020.11.21~31.
- 52) 松本俊彦:【学術講演】ハームリダクションとは何か?一つながりと包摂の公衆衛生政策ー. 第27回日本精神科看護専門学術集会, Web, 2020.12.5.
- 53) 松本俊彦:【シンポジウム18】日本におけるハームリダクションの実践の可能性. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会, Web(オンデマンド配信), 2020.11.27~12.25.
- 54) 松本俊彦:【シンポジウム5】薬物依存・乱用. 第33回日本総合病院精神医学会総会, Web(オンデマンド開催), 2020.12.7~13.
- 55) 松本俊彦:【シンポジウム4】睡眠薬は安全?:高齢者に睡眠薬を処方する際に注意すべきこと. 第35回日本老年精神医学会, Web開催, 2020.12.21.
- 56) 山本泰輔, 木村尚史, 玉腰暁子, 松本俊彦:覚せい剤依存症患者の性別ごとの特性と治療予後の関連. 第79回日本公衆衛生学

- 会総会 2020, 京都(オンライン開催), 2020.10.20.
- 57) 大宮宗一郎, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 高岸百合子, 小林美智子, 酒谷徳二, 服部真人, 喜多村真紀, 伴恵理子, 松本俊彦: 薬物関連問題と飲酒問題を有する覚せい剤事犯者の特徴: 信頼感に注目した分析から. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web 開催, 2020.11.22.
- 58) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一郎, 加藤隆, 来栖次郎, 栗坪千明, 山村せつ, 吉野美樹, 松本俊彦: 薬物依存症者の就労に関する研究: 特例子会社を対象とした依存症者の就労に関する意識調査. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web 開催, 2020.11.22.
- 59) 船田大輔, 今村扶美, 外山愛, 田川美保, 吉野直記, 近藤あゆみ, 堀越勝, 松本俊彦: 市販薬依存症と複雑性 PTSD を併存し、切迫した自殺行動を呈した際に CPT を施行した患者の治療経過. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web 開催, 2020.11.23.
- 60) 金澤由佳, 熊倉陽介, 伴恵理子, 宇佐美貴士, 高野歩, 松本俊彦: 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の流行に伴う VBP および薬物依存症地域支援への影響に関するアンケート調査～Voice Bridges Project: 「声」の架け橋プロジェクト～. 第9回 更生保護学会, 2020.12.6.
- 61) Yamada, R., Shimane, T., Kondo, A., Yonezawa, M. and Matsumoto, T. The relationship between the perception of “drugs–sex connection” with unprotected sex behavior in rehabilitation centers for drug addiction in Japan. the CINP 2021 Virtual World Congress, 26-28 February, 2021.
- 62) 嶋根卓也, 小林美智子, 高橋哲, 竹下賀子, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 近藤あゆみ, 高野洋一, 山木麻由子, 松本俊彦: ミニセッション S5 「覚せい剤事犯者の理解とサポート: 性差に着目した分析、覚せい剤事犯者における薬物依存症の重症度と再犯との関連: 性差に着目した分析. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 63) 嶋根卓也: シンポジウム 4 「オピオイド鎮痛薬、乱用のその先」, 仲間と共に回復する薬物依存-ダルク追っかけ調査より-. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 64) 嶋根卓也: シンポジウム 6 「HIV 感染症と薬物使用 (依存) の予防」, Understanding and supporting drug users with HIV infection in Japan. 第34回日本エイズ学会学術集会, Web, 2020.11.27-29.
- 65) 児玉知子, 大澤絵里, 浅見真理, 戸次香奈江, 松岡佐織, 嶋根卓也, 松本俊彦, 三浦宏子, 樺田尚樹, 横山徹爾: 日本における Universal Health Converge の達成状況と課題. 第35回日本国際保健医療学会学術大会日本国際保健医療学会, Web 2020.11.1-3.
- 66) 高岸百合子, 嶋根卓也, 小林美智子, 高橋哲, 竹下賀子, 大宮宗一郎, 近藤あゆみ, 高野洋一, 山木麻由子, 松本俊彦: ミニセッション S5 「覚せい剤事犯者の理解とサポート: 性差に着目した分析、覚せい剤事犯者が自覚している薬物使用の引き金とメリット・デメリットとの関連. 第55回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 67) 近藤あゆみ, 嶋根卓也, 高橋哲, 小林美智子, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 高野洋一, 山木麻由子, 松本俊彦: ミニセッション S5

- 「覚せい剤事犯者の理解とサポート:性差に着目した分析、覚せい剤事犯女性の出所後の薬物依存症治療. 第 55 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 68) 小林美智子, 服部真人, 酒谷徳二, 嶋根卓也, 谷真如, 高橋哲, 大宮宗一郎:薬物依存、アルコール依存、ギャンブル障害の各問題から見た覚醒剤事犯受刑者の特徴, 第 55 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 69) 猪浦智史, 加藤隆, 嶋根卓也:薬物依存症回復支援施設における生活習慣病予防教室の試み. 第 55 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, Web, 2020.11-22-23.
- 70) 服部真人, 小林美智子, 嶋根卓也, 高橋哲, 高岸百合子, 大宮宗一郎, 谷真如:薬物依存と他の依存(アルコール・ギャンブル)の併存が疑われる薬物事犯者の特徴. 第 58 回日本犯罪心理学会, Web, 2020.11.21-22.
- 71) 山田理沙, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦:薬物依存症者を対象とした薬物使用の影響によるコンドームを使用しない性交渉に関連する研究. 第 34 回日本エイズ学会学術集会, Web, 2020.11.27-29.
- 72) 井ノ口恵子, 渡邊敦子, 新田千枝, 森田展彰:再犯防止推進計画における薬物依存者の回復を地域で支援するー更生保護施設を中心とした多職種意見交換会(2), 第 55 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, WEB 開催, 2020.11.21.
- 73) 引土絵未, 小高真美:薬物依存症者の就労支援について 民間依存症回復支援施設に対するインタビュー調査.日本社会福祉学会第 68 回秋季大会, web 開催 (E ポスター), 2020.9.12.
- 74) 高橋康史・中村正・市川岳仁・幸田実・中川賀雅:立ち直りから『居直り』へ——ダルクの多元性・地域性を考える. 日本犯罪社会学会第 47 回大会, オンライン開催, 2020.10.4.
- 令和 3 年度
- 75) Enjeline Hanafi, Kristiana Siste, Chika Yamada, Youdiil Ophinni, Albert Prabowo, Evania Beatrice, Vania Refella, Peter Allison, Toshihiko Matsumoto, Ryota Sakamoto. Evidence of Telemedicine from a Developing Country During COVID-19 pandemic—A Virtual Relapse Prevention Program Among a Clinical Sample of Substance-Use Disorder Patients. Poster presented at the 2021 NIDA International Forum/ College on Problems of Drug Dependence International Research Posters session, Online. June 21-24, 2021.
- 76) 松本俊彦:アルコールとうつ、自殺～「死のトライアングル」を防ぐために. 第 19 回日本旅行医学界大会, オンライン, 2021.4.11.
- 77) 松本俊彦:自殺と自傷. 日本心理臨床学会第 40 回大会, オンライン, 2021.9.5.
- 78) 松本俊彦:最近の薬物関連精神障害の傾向と対策. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.19.
- 79) 松本俊彦:依存症臨床からみたハームリダクションの必要性. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.19.
- 80) 松本俊彦:自己破壊的で嗜癖な問題行動とどう向き合うか?ー自殺の保護的因子に

- して危険因子としてのアディクション. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, Web, 2021.8.20.
- 81) 松本俊彦: 日本社会精神医学会相模原事件特別委員会の問題意識と活動. 第 117 回日本精神神経学会学術総会, 京都, 2021.8.21.
- 82) 松本俊彦: 児童思春期における精神科救急の役割を考える～精神科救急に期待されることはなにか～ 児童・思春期と薬物乱用. 第 29 回日本精神科救急学会学術総会, Web, 2021.10.24.
- 83) 松本俊彦: 発達障害と薬物依存症. 第 8 回成人発達障害支援学会滋賀大会, 滋賀, 2021.11.7.
- 84) 松本俊彦: 救急医療施設に搬送される市販薬中毒患者の依存・乱用について—他施設共同調査の中間報告— 第 34 回日本総合病院精神医学界総会, Web, 2021.11.20.
- 85) 松本俊彦: 死のトライアングル—アルコールとうつと自殺. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 86) 松本俊彦: 薬物依存症臨床における最近のトピック. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.19.
- 87) 松本俊彦: 2021 年度版 SMARPP における改訂のポイント～HCV 治療も含めて～. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 88) 引土絵未, 嶋根卓也, 小高真美, 秋元恵一朗, 加藤隆, 栗栖次郎, 栗坪千明, 山村りつ, 吉野美樹, 松本俊彦: 依存症者の就労支援に関する研究: 就労支援機関を対象とした依存症者の就労に関する実態および意識調査. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 89) 猪浦智史, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦: 回復支援施設におけるアルコール依存症者の予後に関する研究. 2021 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 90) 高野歩, 大野昴紀, 野沢恭介, 松本俊彦, 松下幸生, 湯本洋介, 小貫真希, 妙圓園香苗, 佐藤牧人, 瀬々潤: モバイルデバイスを用いたアルコール・薬物使用リアルタイムデータ収集と介入プログラムの開発. 21 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.18.
- 91) 喜多村真紀, 嶋根卓也, 服部真人, 高橋哲, 竹下賀子, 小林美智子, 松本俊彦: 薬物使用のトリガーとしての月経前症状と薬物関連問題重症度の関係について. 21 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, オンライン, 2021.12.19.
- 92) Shimane T, et al.: Relationship between drug recidivism and the severity of problems related to drug use among male and female prisoners: A nationwide, cross-sectional survey in Japan. Asian Criminology Society 12th Annual Conference, web, 18-21 June 2021.
- 93) Shimane T: Understanding and support for marijuana using youth in Japan. 2021 International symposium on prevention and counseling of drug abuse for juveniles, Ministry of education, Republic of China (Taiwan), November 11-12 2021.
- 94) Shimane T: SDG3.5 Indicators for prevention and treatment of substance abuse in Japan. The 80th Annual Meeting of Japanese Society of Public Health, Tokyo (web), December 21-23 2021.

- 95) 嶋根卓也：薬物依存と「選択」のストーリー。シンポジウム4「薬物の与えるインパクト：選択」。2021年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，三重（オンライン），2021.12.18.
- 96) 嶋根卓也，高橋 哲，小林美智子，高岸百合子，竹下賀子，近藤あゆみ，大宮宗一郎，高野洋一，山木麻由子，服部真人，松本俊彦：覚醒剤事犯者の危険な性行動および覚醒剤の使用動機。第35回日本エイズ学会学術集会，東京（オンライン），2021.11.21-12.20.
- 97) 渡邊敦子，森田展彰，新井清美，井ノ口恵子，受田恵理，大宮宗一郎，川井田恭子，道重さおり，山田理絵，染田恵：刑の一部執行猶予制度下での薬物事犯者に対する地域支援—更生保護施設で支援を受ける薬物事犯者の認識—。第56回日本アルコール・アディクション医学会，三重県（Web開催），2021.12.19.
- 98) 喜多村真紀，森田展彰：更生保護施設に入所する薬物関連問題を持つ女性の回復プロセス。第58回日本犯罪学会総会，Web開催，2021.11.27.
- 99) 森田展彰，喜多村真紀：更生保護施設の薬物事犯者における入所時から退所時の回復状況。第58回日本犯罪学会総会，Web開催，2021.11.27.
- 100) 高橋康史：刺青とアイデンティティの社会学—不可視化されたスティグマの身体化—。2021年度東北社会学研究会大会，オンライン，2021.12.3.

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

